



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	W.J. アシュレーによる方法論争の総括
Author(s)	佐々木, 憲介
Citation	経済學研究, 58(1), 39-55
Issue Date	2008-06-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33843
Type	departmental bulletin paper
File Information	39-55.pdf



W.J. アシュレーによる方法論争の総括

佐々木 憲 介

はじめに

本稿で取り上げるウィリアム・ジェームズ・アシュレー(William James Ashley, 1860-1927)は、イギリス歴史学派を代表する人物の一人として、経済学史に名を残している。その経歴を簡単に振り返ると、次のようなものである。彼は、1860年にロンドンの帽子職人の息子として生まれ、1878年にオックスフォード大学に入学した。自ら語るところによれば、オックスフォードではトインビー(Arnold Toynbee, 1852-1883)からとりわけ大きな影響を受け、その下で経済学を真剣に勉強し始めたという。トインビーの没後に出版された『英国産業革命史(*Lectures on the Industrial Revolution of the Eighteenth Century in England*)』は、その大部分が、トインビーの講義を聴講したアシュレーのノートを基にしたものであった(Ashley 1955, pp.35-36, 訳 172-173)。1885年にリンカン・カレッジのフェローとなり、個人指導や講義を担当する。1888年には大西洋を渡り、トロント大学の法制史および経済学(*Constitutional History and Political Economy*)の教授に就任した。1892年に、ハーヴァード大学の経済史(*Economic History*)の教授となるが、これは英語圏で最初の経済史の教授職であった(Koot 1987, p.103)。1901年、アシュレーは商学の教授としてイギリスに戻った。バーミンガム大学に新設された商学部の責任者として招聘されたのである。1926年に経済史学会(*Economic History Society*)が創設されると、その初代会長に選出された¹⁾。

経済学史上のアシュレーの貢献は、次の四点にまとめることができる。第一に、イギリスにおける経済史学の確立に寄与した。ケンブリッジ大学で初代の経済史教授の職に就いたJ.H.クラッパムによれば、イギリス経済史という新しい学問分野を確立したのは、カニンガムの『イギリス商工業の成長』(*The Growth of English Industry and Commerce*, 1882)とアシュレーの『英国経済史及び学説』(*Introduction to English Economic History and Theory*, Part I 1888; Part II 1893)という二つの著作であった。また、『イギリス経済史講義』(*The Economic Organization of England*, 1914)は、英語で書かれた経済史の入門書として、最良のものであると評価されている(Clapham 1927, pp.680-681)。第二に、アシュレーは、商学教育の制度化に尽力した人物でもあった。すなわち、19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカやドイツを先頭に、商人や経営者を養成するための高等教育機関を設立しようという動きが現れたが、アシュレーによるバーミンガム大学商学部の組織化は、このような流れに倅差すものであり、イギリスにおける商学教育の先駆けとなるものであった²⁾。アシュレーは、経済学は二つの方向で拡張され

- 1) アシュレーの経歴の詳細については、彼の娘であるアン・アシュレーが執筆した伝記を参照されたい(Ashley, A. 1932)。また、西沢(2007, 第I部第3章)は、オックスフォードの伝統とアシュレーの思想との関連を詳しく論じており、非常に参考になる。
- 2) この点については、西沢(2007, 第II部第4章)を参照されたい。

なければならぬと考えていた。その一つが、現代史を含む経済史であり、もう一つが、商学 (Science of Commerce) あるいは企業経済学 (Business Economics) だったのである (Ashley 1908, pp.186-191)。第三に、アシュレーは、経済政策論史において取り上げられることも多い。すなわち、1903年に、当時の保守統一党内閣の植民相ジョゼフ・チェンバレンが、それまでの自由貿易政策から保護貿易政策に転換すべきことを主張し、関税改革論争が始まるのであるが、アシュレーはチェンバレンを支持して、自由貿易の維持を唱えるマーシャルなどと対立したのである³⁾。そして第四に、経済学方法論史上の貢献がある。理論派と歴史派との間で戦わされた方法論争は、ドイツ語圏だけではなくイギリスでも起こっていた。イギリスにおける方法論争は、1870年代に始まり、1892年のマーシャル・カニンガム論争を掉尾として終幕を迎えることになる。アシュレーは、歴史学派のなかでも若い世代に属しており、方法論争に直接参加するというよりも、それを後から総括する立場にあった。本稿が考察の対象にするのは、この第四の貢献に関わる問題である。

アシュレーは、イギリス歴史学派のなかで、もっともドイツ歴史学派の影響を受けた人物とされる。しかし、そもそも彼が歴史学派の見地へと導かれたのは、クリフ・レズリーやトインビーといったイギリス歴史学派の影響によるものであった。アシュレーは、1880年、1883年、1884年に、短期間ドイツを訪問しているが、ドイツ語をまだ十分に読むことができなかったため、1880年代にドイツ歴史学派について獲得した知識は、クリフ・レズリーを介した間接的なものであった (Koot 1987, p.104)。また先に触れたように、アシュレー自身も、経済学について最大の教示を与えてくれたのはト

インビーであったと述べている。アシュレーとドイツ歴史学派との関係について、シュンペーターは次のように述べているが、それはわれわれの課題にとっても示唆を与えるものということができる。

ウィリアム・ジェームズ・アシュレーは、……他のイギリス経済学者のどれよりも当時のドイツの経済学専門家のタイプに合致していた。その青年期に経済史家や法制史家の影響 (特にトインビーとメイン、後にはドイツ学者の影響) を受けたが、彼は自分の著作——例えば産業に関するその見事なモノグラフ、および非常に成功した『英国経済史及び学説』(2巻, 1888年および1893年)——や、その方法論的発言や、社会政策および経済的ナショナリズムに対する彼の共感において、ドイツの経済学専門家のタイプに対して忠実であった。しかし、彼は自分のイギリス的環境から十分なものを吸収していたので、彼が模範としたものの粗雑さに対して耐性があった。イギリスに住んでいる人であれば、おそらくだれも、シュモラーがその経歴の初期に行ったように、経済理論を全く誤解するということはないであろう。(Schumpeter 1954, pp.822-823)

すなわち、アシュレーはドイツ歴史学派に対して敬意を払い、多くの点でそれを模範とみなしたが、経済理論の理解という点では両者に違いがあった。アシュレーは、リカードウ、J.S.ミル、マーシャルといった「正統派」経済学者の著作を読み、それを十分に消化した上で、歴史学派の主張を展開した⁴⁾。われわれがアシュレーを取り上げるのも、経済理論の伝統に精通

3) この点については、Semmel (1960, ch.11)、服部 (1999, 第9章) および西沢 (2007, 第Ⅲ部第1章) を参照されたい。

4) アシュレーは、古典派とマーシャルの理論を同一視していたわけではない。抽象的な経済理論を支持するという点で両者には共通性があるが、その実質的な理論内容はかなり異なっている、と考えていた。彼は、「リカードウの復権」(Ashley 1891)において、マーシャルがリカードウとの連続性を強調したことを批判し、二人の学説の相違を指摘している。また、「経済学

した歴史学派の論者が方法論争をどのようにに総括したのか、ということに注目するからである。学問上の論争が双方の無理解と非難の応酬に終始することは、珍しいことではない。しかし、われわれは、そのような無理解と非難の背後にある論争の意味を探究しなければならない。すなわち、経済学史上最も有名な論争の一つである方法論争は、どのような意味をもつ論争であったのか。われわれは、この問題を探究するための手がかりを、アシュレーの議論のなかに求めたいと思うのである。

『英国経済史及び学説』1906年版の注において、アシュレーは、経済学の本質および方法については、論文「経済史の研究について」(Ashley 1893)、「経済史の研究について: 7年後」(Ashley 1899 a)およびパルグレーヴ『経済学事典』の事典項目「経済学者の歴史学派」(Ashley 1896)の3点を参照することを求めている(Ashley 1909)。そこでわれわれも、この三つの著作を中心に、アシュレーの経済学方法論を検討することにしたい。

I 歴史学派と方法論争

1. 歴史学派の展開

アシュレーは、「経済学者の歴史学派」において、経済学の分野における歴史学派の運動をふりかえり、その意義について論じる。それによれば、「歴史学派は、現在おそらくドイツでは概して優勢であり、イングランドを含むすべての他の主要国に代表者を擁し、経済科学に相当な貢献を行ったことが認められている」(Ashley 1896, p.310)。しかし、その運動の価値については評価が定まっておらず、また代表者たちの間に著しい見解の相違がある。そうした状況

のなかでアシュレーは、歴史学派に特徴的な諸観念の継起と由来を辿りながら、その成果と意義を整理しようとするのである。彼によれば、歴史学派は、「古典学派(classical school)」、「演繹学派(deductive school)」、もしくは「理論学派(theoretic school)」といった名称で呼ばれる学派に対する批判も行うが、その研究のかなりの部分は、より建設的な方向、すなわち経済史の研究に向けられている。アシュレーは、この経済史研究こそ、歴史学派運動の第一の成果であると考えていた。

経済学における歴史学派の運動を考えると、古典派経済学との関係を軽視することはできない。歴史学派のような研究の方向は、とくにリカードウの経済学に対する反動として、現れるべくして現れたものといえるからである。アシュレーによれば、アダム・スミスの考え方も、全体として本質的には非歴史的であり、その歴史叙述と帰納的推理も演繹的な思考過程に従属していた⁵⁾。しかし、歴史学派の登場について語ることができるのは、「正統派の(orthodox)」あるいは「抽象的な(abstract)」理論構造がリカードウによって完成され、その亜流によって通俗化されるようになってからである。経済学における歴史学派が登場するのは、あくまでもリカードウ後であるとされるのである。では、具体的にはどのような人物を歴史学派として位置づけていたのだろうか。まず、ジョーンズ、リスト、コントの三名が先駆者として挙げられる。これらの三名は、歴史研究の重要性を指摘しただけではなく、とくに次のような観点を示していた。ジョーンズは、リカードウの地代論が、ごく最近の時代のごく小

の歴史と現状についての概観」(Ashley 1907)では、抽象的経済学の歴史を二段階に区分し、第一段階の代表者はリカードウであるが、第二段階の担い手は「限界主義者(Marginalists)」であると述べている。

5) イギリスにおける初期の歴史学派運動を先導したクリフ・レズリーは、スミスの歴史研究の部分を評価して、スミスを経済学における歴史的方法の創始者とみなした(Leslie 1875, p.174)。したがって、アシュレーとレズリーとは、スミスの位置づけについて意見が一致していなかったといわなければならない。

さな地域にしか当てはまらないことを論じた。リストは、温帯地域にある文明国の経済史を5段階に区分し、それによって歴史的進化の観念をドイツ思想に投げ入れた。さらにコントは、経済現象は他の社会的事実とからみあっているため、経済現象についての別個の科学は不可能であると論じた。すなわち、これらの先駆者たちは、それぞれ「学説の相対性」「経済発展論の重要性」「社会現象の統一性」という観点を、とくに鮮明に示していた。したがって、アシュレーはこれらの観点を歴史学派に特徴的な観点として認識していたことができる。

歴史学派の創始者は、ロッシャーであるとされる。ロッシャーは、1843年に出版した『歴史的方法による国家経済学講義要綱(Grundriss zur Vorlesungen über die Staatswirtschaft. Nach geschichtlicher Methode)』の序文において、歴史的方法を研究の指針とすることを明言した。アシュレーはこの序文を英訳して *Quarterly Journal of Economics* 誌上に公表するのであるが、それは、この序文がロッシャーだけではなく、それ以降の歴史学派の研究をも導く、綱領(programme)あるいは宣言(manifesto)となったからである(Ashley 1894, p.31)。さらに『要綱』は、学説の歴史的相対性という原理を伴い、経済学を国民経済の発展法則に関する学説としている。このように、歴史学派の特徴をなす諸観点を認める一方で、アシュレーは、ロッシャーのなかに古典派的な側面があったことも認めている。すなわち、ロッシャーの大著『国民経済体系(System der Volkswirtschaft)』の第1巻『国民経済の基礎』(1854年; 英訳1878年)は、「非常に旧式の方針に沿って構築されており、ミルの『経済学原理』に経済学文献史に基づく引用や注を付したものととっても不適切ではない」(Ashley 1896, p.311)という⁶⁾。しかし、すぐに続けて、これは彼の著作の中で科学的に最も重要ではない部分であるとし、ロッシャーの最良の研究は、『体系』の第2巻『農業経済論』(1859年)および第3巻『商工経済論』(1881年)で

あって、ここでは、社会の骨格をなす具体的な経済制度の成長および状態の変化が追跡されている、と述べるのである。アシュレーがロッシャーを歴史学派の創始者とするのは、ロッシャーが歴史学派のいくつかの観点を示していたからというよりも、『要綱』がドイツ国内に一つの「運動(movement)」を生み出したことを認めたからであった。

ロッシャーの『要綱』が呼び起こした運動は、その直後に現れた二人の作家、すなわちヒルデブラントとクニースの登場によって、さらに勢いを強めた。そのため、ヒルデブラントとクニースは、「その後正当にも、ロッシャーとともに歴史学派の共同創始者とみなされるようになった」(Ashley 1896, p.311)。しかし、アシュレーは、これらの三人の間に見解の相違があったことも指摘する。とくにクニースは、「ロッシャーとヒルデブラントによって開かれた方向、すなわち経済的進化の法則を探究するという方向」から離れた(Ashley 1896, p.312)。クニースは、学説の相対性という観念を拡張し、経済学説は時代ごとの条件に依存するだけではなく、空間的に変化する条件にも依存するとして、国民経済の普遍的な発展法則について否定的な見解を示したというのである。このような相違はあったけれども、三人の作家から湧き出た思想の波はドイツ全土に及んでゆき、歴史学派の運動が興隆することになった。思想の内容という点では、「新しい運動はどこでも、(1)経済理論の相対性、(2)現在の経験的・統計的観察を含む経済史研究の望ましさを主張

6) このような評価は、シュンペーターのロッシャー解釈に通ずるものである。シュンペーターは、「ロッシャーの分析的装置に関する限りでは、彼はたまたま歴史的例証にとくに強い趣好を抱いた者ではあるが、しかしイギリス『古典学派』のはなはだ功績の高い後継者として分類されるべきである」と述べている(Schumpeter 1954, p.508)。また田村(1993)は、ロッシャーを、歴史学派の事実上の創始者というよりも、その精神的創始者であったとしている。

するという特徴をもっていた」(Ashley 1896, p. 312)。

1872年に社会政策学会が創設されるとともに、ドイツ歴史学派は新たな展開を見せることになる。

それまで、専門的経済学者は実際政治面での発言を行わなかった。今や彼らは団結して、「社会問題」の存在を認識し、その解決に向けて国家が行動することを訴えた。かくして彼らは、多数のジャーナリストや政治家の不興を買うことになった。彼らの大部分は、ロッシャー、ヒルデブラント、クニースいずれかの弟子であったから、「歴史学派」は講壇社会主義者と同義のものとなった。経済学者自身の間でさえ、とにかく古典派経済学者およびそのドイツにおける追隨者に反対する者すべてを受入れ、その主義主張の中に「帰納的」、「現実的」および「倫理的」なものを包含させるために、その用語が使われた。(Ashley 1896, p.312)

しかし、アシュレーによれば、このようにとりあえず一つの陣営に集まった有能な人々が、一般的な事柄を超えて発言するやいなや、相違が感じられるようになるのは避けられないことであった。とくに、ヴァーグナーが、重農学派およびアダム・スミスの経済理論に代わるものを新たに構築し始めたのに対して、シュモラーは、今はそのようなことを試みる時期ではなく、経験的・統計的・歴史的研究の時代がそのような試みに先行しなければならない、と主張した。これを受けて、ヴァーグナーたちは、シュモラーを「過激な歴史主義(extreme Historismus)」として批判するようになったというのである(Ashley 1896, pp.312-313)。この記述を見る限りでは、アシュレーは、シュモラーとヴァーグナーの対立を歴史学派内部の対立とみなしていたように読むことができる。しかし、別の論考「経済史の研究について」では、ヴァーグナーは、歴史的思考の影響を受けた理論経済学者(theoretic economist)とされている

(Ashley 1893, pp.4-5)。ヴァーグナーは、社会政策学会の創設メンバーであったから、先の引用文の規定からすれば、たしかに講壇社会主義者であり歴史学派であるということになる。しかし、その名称でくくられていた人々の間で、やがて分岐が鮮明になり、表面的な統一性は失われてゆく(Ashley 1899b)。アシュレーがヴァーグナーを歴史学派と呼ぶのは学会創設の時点についてのみであり、分岐が鮮明になった後は、むしろ理論経済学者として位置づけている。これに対して、シュモラーは、一貫して新世代の歴史学派を代表する人物とみなされている。アシュレーは、シュモラーに率いられた一団を新歴史学派(newer historical school)と呼び、創始者たちの旧歴史派経済学(older historical economics)から区別するのである(Ashley 1893, p.7; Ashley 1896, p.313)。

イギリスの歴史学派運動について見ると、ソロルド・ロジャーズが早くも1866年に、『イングランドにおける農業と物価(History of Agriculture and Prices in England)』(2巻, 1866年)において、過去の経済史に関する綿密な研究の実例を示していたが、ドイツで人気を博していた諸観念をイギリス思想に導入したのは、クリフ・レズリーであった。クリフ・レズリーによれば、それぞれの国民経済は全体として長い進化の所産であり、そこには連続性と変化がともに見られ、経済的側面はその進化の特殊な一面あるいは一局面にすぎない。かくしてクリフ・レズリーは、クニースの教説とコントとを結びつけた最初の人物であった、とアシュレーは述べる。アシュレーは、クリフ・レズリーの議論のなかに、学説の相対性と社会現象の統一性とを結びつける観点を見出したのだと思われるのである。この方向は、その後イングラムによって、いっそう徹底的に遂行された。「しかし、ドイツにおいてと同様に、イングランドにおいても緊急に必要とされたのは、経済史の詳細な研究と体系的な教育を始めることであった」(Ashley 1896, p.313)。この方面で最初の刺激

を与えたのは、カニンガム『イギリス商工業の成長』(1882年)であり、またトインビー『英国産業革命史』(1884年)であった。ここで名前が挙げられているロジャーズ、レズリー、イングラム、カニンガム、トインビーに、アシュレー自身を加えると、経済学史上の「イギリス歴史学派」をほとんど網羅することになる。しかしアシュレーは、さらに続けて、経済史分野への関心を高めるのに寄与した研究として、シーボーム、メイトランド、ヴィノグラードフ、チャールズ・ブース、シドニー・ウェップの諸著作を挙げる。つまり、アシュレーによれば、イギリス歴史学派とは、古典派経済学に対する方法論的批判に始まり、やがて経済史の詳細な研究と体系的な教育へと移行し、後続する経済史の研究者に継承されてゆく、一つの運動だったのである。

2. 方法論争の総括

ドイツで支配的な地位を確立した歴史学派に対して、1883年にオーストリア学派の創始者カール・メンガーが方法論的な批判を加えたことを端緒として、長期間にわたる「方法論争(Methodenstreit)」が戦わされることになった。しかし、この頃、歴史派と理論派との間で方法論争が行われたのは、ドイツではなかった。イギリスにおいては、ドイツに先行して、類似の論争が1870年代から始まっていたのである。イギリスにおける方法論争の特徴は、ドイツとは逆に、歴史派が理論派に対する批判を加えることによって論争が始まったという点であった。すなわち、クリフ・レズリーやイングラムは、1870年代から古典派経済学に対する激しい方法論的批判を開始し、これに反論したロバート・ロウやシジウィックとの間で論争が行われたのである。さらに、1885年にマーシャルがケンブリッジ大学の経済学教授に就任して新しい正統派が形成されるようになると、歴史学派の批判はマーシャルに向けられるようになり、カニンガムとマーシャルとの間

で、方法論争の第二段階ともいべき論争が起こった。しかし、両者の応酬があった1892年以降になると、イギリスにおける方法論争は急速に下火になり、終息に至るのである⁷⁾。

アシュレーは、そのような状況に臨んで、歴史学派の立場から方法論争の総括を行った人物であるということが出来る。方法論争についてのアシュレーの見解は、1893年1月4日にハーヴァード大学で行った経済史の序論的講義「経済史の研究について」のなかに、とくに明白に示されている。したがって、われわれも、この論考を中心に、アシュレーがどのように方法論争を総括したのかということを検討することにしたい。彼はまず、方法論争後のイギリスの経済学者の間に、寛容の精神が行き渡っているという認識を示す。

このことは、先行世代、すなわちジョン・ステュアート・ミルの著作の出版から、クリフ・レズリーの諸論文で反逆の最初の意味表明が行われるまでの時期に見られた、独断的な教条主義と全員一致に戻ったことを意味しない。それが意味するのはむしろ、なお著しい相違はあるけれども、一つの方法の支持者がもはやその方法を科学的探究の唯一の方法であると主張せず、その反対に、帰納法信奉者がいまでは演繹の価値をいっそう十分に認識し、最も抽象的な者もしばしば事実に言及するし、最も具体的な者も時には抽象を利用するのであり、そして、よりいっそう重要なのは、自分自身の思想がどうであれ、自分と共同歩調を取らない者に干渉せず、さらには、彼らが価値ある到達点に至ることを期してその道を行くのを激励さえする、ということなのである。(Ashley 1893, pp.1-2)⁸⁾

7) クリフ・レズリー、イングラム、およびカニンガム・マーシャル論争については、それぞれ、佐々木(2000, 2001, 2006)を参照されたい。

8) 引用文中の傍点は、原文がイタリックで強調されていることを表す。

すなわち、方法論争はしばしば、理論派が演繹法を支持し、歴史派が帰納法を支持するという図式で行われたが、いまや両陣営とも、どちらか一方の方法を科学的探究の唯一の方法であるとは主張しない。また、異なる方法で行われる研究に対しても、それを非難するのではなく、その道を進むのを激励さえる、というのである。研究者は、「心、気質、訓練、および機会」がそれぞれ異なるのだから、さまざまな方向で仕事をするのは当然である。アシュレーによれば、自分が特定の方向に沿って考えるのは、主として自分自身の精神的適性がその方向に合っているからだ、ということを経験するのはしばしば困難である。自分自身が惹かれている研究が、すべての課題の中で最も緊急かつ有益なものだと感じるのは、きわめて自然である。したがって、シュモラーとメンガーが衝突したのも、その意味では避けられないことだった(Ashley 1893, pp.7-8)。しかし、「ドイツの同僚の生活を平穏ならざるものにした論争は、英語圏の経済学者の間には、今やただかすかな反響しかない」(Ashley 1893, p.2)。したがって、カニンガムとマーシャルという、卓越した二人のイギリス人経済学者の間で最近行われた敵対的な応酬は、ほとんど時代錯誤に見える。これが、方法論争後の状況についての、アシュレーの認識であった。

では、歴史学派の立場から見た場合に、方法論争にはどのような意味があったのか。

ドイツの「歴史」学派もしくは「帰納」学派の若手(the younger men)が20年ほど前に抱いた望み、そして、イングランドの作家のなかではクリフ・レズリーと、より最近ではイングラムが抱いた望みは、今までのところ実現されていない、ということを否定しても無駄であろう。彼らは経済科学の完全かつ迅速な転換を求めた。そのような完全な転換が起こっていないことを知るには、今日最も広く使われている教科書を一瞥するだけでよい。(Ashley 1893, p.2)

かつての過激な歴史学派が抱いた望みというのは、経済学における抽象的・演繹的・理論的な方法を廃棄して、これを歴史的方法によって置き換えるということであった。すなわち、ある仮定された状況を想定して推論するのではなく、与えられた事実の大海に飛び込み、そのなかから一般的なものを出導するという方法が採用されなければならない、ということである。ドイツにおいてはシュモラー、イギリスにおいてはクリフ・レズリーとイングラムが、このような主張を行っていた。だが、こうした願望が実現することはなく、その意味で、過激な歴史学派の路線は挫折したといわなければならない。

しかし、このことは、正統派の方法論が勝利したことを意味するものではない。アシュレーによれば、歴史学派の運動は、一方で、正統派の経済学者に影響を及ぼすとともに、他方で、それ自身の真の活動分野に向かって前進してきた。前者の側面について述べるならば、歴史学派の運動は、経済学者自身の教説に対する精神的態度全体を変えた、というのである。

経済学の結論は、所与の条件に対して相対的であり、ただ仮説的妥当性をもつだけであるという二つの重大な原理——それらは同じ観念の異なった形態にすぎない——の受容は、最終的に経済学者の精神的習慣の一部になった。経済的な考慮事項はわれわれが社会現象を判断するさいに取り上げなければならない唯一の事項ではないし、経済的な諸力は人間を動かす唯一の力ではないという確信についても、同じことが言える。(Ashley 1893, pp.3-4)

すなわち、「学説の相対性」「社会現象の統一性」および「行為の多元性」という歴史学派の観点が、正統派の経済学者にも共有されるようになり、経済学者は自分自身の教説が狭い範囲をとり扱うものであることを自覚するようになった。これらの観点は、かつては一部の者のみが

認識していたことであつたが、いまや専門的経済学者全体に認められるようになった、というのである。しかし、アシュレーによれば、歴史学派の運動が正統派の経済学者に及ぼした影響は、これだけではない。自分の教説に対する精神的態度を改めたというだけではなく、理論経済学者自身が、歴史的な省察を取り入れるようになったのである。

それらが十分に明白になるのは、われわれが二つの最重要な現代の著作、すなわちマーシャル教授の『原理(Principles)』とヴァーグナー教授の『教本(Lehrbuch)』をひもとく場合である。マーシャル教授は、現代の諸条件の理解が、それらの発生を考察することによって助けられるということをしきり明瞭に認識していたので、自分の著作への導入として、「自由な産業と企業の成長」に関する二つの章と、「経済科学の成長」に関するもう一つの章を配した。そしてまた、生産に関する彼の議論の前に位置するのは、生産に関する学説の歴史と、イングランドにおける人口の歴史そのものである。産業組織に関する彼の議論は、その大部分が歴史的な省察からなっている。分配理論の導入となっているのは、その歴史的概観であり、地代学説は初期の土地所有形態との関連で考察されている。(Ashley 1893, p.4)

ヴァーグナーについては、歴史的思考の影響はよりいっそう顕著である。彼は、多くの史料を収集するだけではなく、経済学上のカテゴリー、例えば「資本」は「永久的」なものではなく「歴史的」なものである、という見地を受入れる。さらに、一つの歴史法則(経済的進化の行程に関する法則)、すなわち「公的・国家的活動が拡大してゆくという法則」を定式化することさえ試みている、というのである。アシュレー自身は、歴史法則の定式化には慎重であつた。そのような一般化は示唆に富むものではあるが、必ずしも歴史的史料を用いる正確な、あるいは望ましい方法であるとみなされるべきでは

ない。次章で述べるように、レズリーやイングラムとは違って、アシュレーは歴史法則の定式化を研究の課題とは考えていない。それでもなお、ヴァーグナーによる歴史法則の定式化をあえて取り上げたのは、それが「古い伝統を維持しようとする著作家にさえ及んでいる時代精神の、大部分は理解されていない影響を例示している」からであつた(Ashley 1893, p.5)。

このように、歴史学派の運動は、正統派の経済学者に対して、その理論に対する精神的態度を変化させるとともに、歴史的な省察を取り入れるように促したという点で、大きな影響を与えた。しかし、歴史学派運動の最大の成果は、これではなかつた。アシュレーによれば、歴史学派がそれ自身の経路を着実に進んでいること、すなわち経済史の実際の研究を進めていることこそ、歴史学派運動の成果なのであつた。ことによると、これはやや意外な注釈かもしれない、とアシュレーは述べる。「それでは、この学派の経済学者は、それまで何をしていたのか」、と問われるかもしれない。しかしながら、この学派の創始者たちは、本源的な歴史研究者というよりも、その周囲にあつた歴史的思考に触れ、その諸観念から影響を受けた人々であつた(Ashley 1893, p.6)。すなわち、ドイツにおける旧歴史学派や、イギリスにおけるクリフ・レズリー、イングラムは、歴史学派の方法論を高唱したけれども、実際に経済史の研究に打ち込んだとはいえない。経済史の本格的な研究のためには、その後の世代を待たなければならなかつた、というのである。

新世代の歴史学派の指導者たちは、詳細な調査にその身を投じ、独自の歴史学の構築に向けて手探りで進んでいる。ドイツにおいては、シュモラーやクナップが研究者を組織して歴史的探究に取り組んでいる。イギリスにおいては、前節で触れたように、カニングムやトインビーによって切り開かれた道を、後続の経済史家がさらに拡張している。このような状況を踏まえて、アシュレーは、「もう論争は休戦にす

るべき時期である」(Ashley 1893, p.8)と言うのである。これからの20年間、両者を相互に厳格に分離して、その結果をみることにしよう。時間があれば、互いに著書を読むことにしよう。もし賛成できないとしても、沈黙することになろう。大切なことは、相手を非難することではなく、自分自身の探究を進めることである。このように語りながらも、アシュレーは、方法論争がむだなものであったとは考えていない。イギリスにおいては、歴史派経済学者の権利が認められるまで、かなりの戦いが必要であった。ドイツにおいては、正反対の害悪が存在し、学問的影響力をもつ地位から経済理論家があまりにも完全に排除されていた。「しかし今や、名誉ある条件で休戦協定に署名できるのだから、そうするのが当を得たことである」(Ashley 1893, p.9)。このように述べて、アシュレーは、歴史学派の流れを汲む者に、経済史の研究に邁進することを求めた。同時に、これから経済学の道に進もうとする学生に対して、経済史の領域にはほとんど人跡未踏の分野があるとして、それが将来有望な分野であると説いたのである。

では、アシュレーが推奨する経済史の研究は、どのような性格のものと考えられていたのであろうか。これを考察することが、次章の課題となる。

Ⅱ 歴史学派の進路

1. 経済史の研究

理論と歴史の関係をどのように考えるのかということ、方法論争において、とくに議論の対象になった問題の一つであった。先に述べたように、イギリス歴史学派の初期の展開を担ったクリフ・レズリーやイングラムは、抽象的な経済理論を否定して、与えられたままの歴史的事実に向き合うべきことを主張した。これに対して、理論派の陣営からは、歴史研究を行うためには理論が必要不可欠であるという反論が

あった。アシュレーは、そのような理論派からの反論の例として、ジョン・ネヴィル・ケインズの次のような議論を取り上げる(Ashley 1893, p.12)。

個々の場合に、直接的証拠によってわれわれに真に与えられるものはすべて、諸々の出来事の複雑な連続であり、そこには因果連関の真の連鎖が無数の異なった仕方で隠蔽されている。したがって、それらはすべての観察者にとって自明であるどころか、科学的な知識を徹底的に身につけた、訓練を受けた学徒だけが看破することができるにすぎない。(Keynes 1891, p.271, 訳 203 頁)

そしてケインズは、歴史的事実のなかに隠された因果連関の例として、次のような事柄に言及する。すなわち、中世における日照りの夏が道具の消耗を生じさせ、結果的に需要の増大と価格上昇を引き起こしたため、土地管理人の報告書はしばしば、早魃による鉄の高価格に言及している。「需要の価格への効果について、これ以上の例証を得ることはできないであろう」(Keynes 1891, p.287, 訳 214 頁)というのである。しかし、アシュレーによれば、経済理論を持ち出すまでもなく、現象間の因果的結合をそのように追跡するのに、平凡な常識以上のものを必要とはしない。歴史家にとっての経済理論の効用について語る言葉が、アシュレーには、不必要に仰々しいと思われたのである。ここで彼が問題にしたのは、経済理論家と経済史家の関心の違いということであった。ケインズの誤りは、経済史家も経済理論家と同様に、まず第一に「需要」や「価格」に関心をもっていると想定する点にある。しかし、経済史家に関心をもつのは、価格の現象というよりも経済発展の問題である。「経済史家の眼前にある研究の性格がよりよく理解されるようになれば、理論の価値についてのそのような過大評価は消え失せるであろう」(Ashley 1893, p.13)。例えば、シーボームの『村落共同体』(*The English Village Commu-*

nity, 1883)とチャールズ・ブースの『人民の労働と生活』(*Labour and Life of the People*, 1889-91)が、社会進歩を真に理解する上で偉大な価値をもっていることを、誰も否定しないであろうけれども、これらの著書のどちらにも、経済理論は目に見える貢献をしていない、というのである。

経済史の課題に関するこのような理解は、ソロルド・ロジャーズに対する批判につながるものであった。実は、上述のケインズによる「需要の価格への効果」に関する例も、ロジャーズの著作から取られたものだったのである。アシュレーは、経済史研究において価格や賃金に全注意を集中する態度について、次のように述べる。

いくらかは、ソロルド・ロジャーズがこの種の史料の収集に全注意を集中したために、また幾分かは、経済理論家が市場の作用に夢中になっているために、経済史家が最も切望しているのは過去数世紀における一日の労働と一日の食料の価格を知ることだ、という考えが増大してきた。この種の事実が貴重なのは、われわれがそれらを適切な場所に置くことができる場合のみである。われわれが第一に求めるのは、それぞれの時代に社会の制度的枠組みになっていたもの、さまざまな社会階級を構成してきたもの、および社会階級間の相互関係、これである。(Ashley 1893, p.16)

ロジャーズは、通常、イギリス歴史学派の代表者の一人と目されている。先に述べたように、アシュレーの「経済学者の歴史学派」においても、イギリスにおける歴史学派の一員として、その名前が挙げられていた。ロジャーズは、確かに経済史研究を精力的に行っており、その点では「歴史学派」なのであったが、経済史研究の方法という点では、アシュレーとの間に大きな相違があった。イングランドが現在の姿をとるに至った道筋を理解する上で、社会進化の観念に導かれて研究を行った経済史家の著作

に比べると、ロジャーズが到達した結論は、貢献するところが少ない。しかも、後者がこの主題の研究に費やした時間と労力は、ロジャーズの10分の1にすぎないにもかかわらず、そうだというのである(Ashley 1889, p.406)。

このように述べるからといって、アシュレーは、経済史研究にとって経済理論が全く役に立たないといっているわけではない。「需要」と「価格」の関係のような、最も単純な因果的結合であっても見逃すかもしれないので、それを予防するために、学生に対して現代経済学の基礎に初めに親しんでおくように助言するのは、賢明な予防措置であろう、と述べる。さらに、現代経済学は、今日の農業・工業・貿易の主要な特徴のいくつかを浮彫りにしているので、その諸定式は経済史家にとって便利な比較基準(standards of comparison)となる。その比較基準によって、経済史家は、過去の諸条件に固有の特徴であるものを、いっそうよく看取するかもしれない、ということを確認するのである。しかし、このような比較基準としての経済理論以上のものは、経済理論が想定している社会状態においてのみ有効であるといわなければならない。また、経済理論が想定している社会状態の事実を研究するときであっても、経済理論の助けが必ず必要になるかということ、そういうわけでもない。ごく最近の時代についてのチャールズ・ブースの研究、および彼の学派と呼んでもよいもの(シュロス、リュエリン・スミス、およびコレット)の研究などは、マーシャルのいう「経済学の機関」を用いることなしに実行されている、というのである(Ashley 1893, pp.13-14)。

アシュレーは、経済史研究の性格を明らかにするために、経済理論との関係だけではなく、歴史学一般との関係についても論じる。経済史は経済学の一分野なのか、それとも歴史学の一分野なのかということは、学問の性格をめぐる問題であるとともに、より現実的には大学組織の編成に関わる問題でもあった。アシュレー

は、この問題について、経済史研究の過去と未来とをつなぐ位置に立って、自分の考えを述べるのである。彼によれば、近年、経済史の知識を前進させる上で多くのことをなしたのは、経済学の訓練を受けるとともに、現代の諸問題への関心から過去の研究に引き寄せられた人々であった。イングランドにおいては、とくにそうであった。

思うに、リチャード・ジョーンズ、クリフ・レズリー、アーノルド・トインビーに対して、経済学者という名前を拒む者はいないであろう。トインビーの事例は、作用していた動機を例証するのに十分なものである。トインビーは、その短い人生の終りに近づくにつれて、ますます過去 2 世紀間の経済史に専念するようになった。それはまさに、「われわれ自身の科学の諸問題」をより深く洞察しようとする堅固な願望によるものであった。(Ashley 1893, pp.17-18)

しかし、これまでの担い手の中心が経済学分野の出身者であったからといって、これからもそうであるとは限らない。経済学の方面からだけでなく、歴史学の方面からも、人々がこの研究に引き寄せられるならば喜ばしい。したがって、経済史の研究がどのグループに割り当てられるかを、あまり気にする必要はない(Ashley 1893, p.18)。分業の利益を確保するために、経済史のための独立した講座を設立することは望ましいが、その講座がどの学科に設けられるかは問題ではない。経済学科・歴史学科のいずれでもよいし、両方に設立されてもよい。アシュレー自身の個人的希望は、「歴史と経済学とを包摂するいっそう大きなあるグループに経済史を入れること」であったが、大学組織の事情もあるので、これは別に取り扱われるべき問題であるという。経済史の研究が実際に行われるのであれば、歴史の経済的側面の研究が学問諸分野の中で取るかもしれない正確な位置や、それが冠することになるかもしれない正

確な名称について悩むのは、愚かなことである。大学がすでに経済学の適切な訓練を受けた歴史家を擁しており、その歴史家が熱心に自分の学生の注意を社会の経済組織の発展に向けようとしているところでは、あるいは十分に広範かつ正確な歴史的知識をもつ経済学者を擁して、その経済学者が現在の経済問題の歴史的背景を示そうと切望しているところでは、独立した講座や独立した課程に拘る必要もない。なぜなら、専門化には不都合も伴うからである。すなわち、現象の一定のグループについて非実在的な孤立化を行い、教師も学生も、歴史の分野は結局一つなのであり、暫定的にのみ分割できるのだということを忘れてしまう危険がある(Ashley 1899 a, pp.24-25)。このように述べて、アシュレーは、一方で経済史の制度化を望みつつ、その弊害にも注意を促すのである。

彼は、経済史の研究で取り上げる諸問題に関して、次のように述べている。

経済史は徹頭徹尾、経済的なものという一つの主要な関心に支配されてきた。それが尋ねるのは、社会的生存の物質的基礎は何であったか、人間生活の必需品と便益品はどのように生産されてきたのか、労働に必要なものを提供しそれを指揮してきたのはどのような組織だったのか、こうして生産された商品はどのように分配されてきたのか、こうした指揮と分配に依存する制度はどのようなものだったのか、農業・工業・商業の方法にはどのような変化が起こったのか、何らかの発展の跡を知ることはできるのか、もしできるのであれば、それは悪い状態から善い状態への発展であったのか、といったことである。これら、およびこれらに類似する多くのものが、経済史の学徒によって問われる問題である。(Ashley 1893, p.15)

アシュレーによれば、このように経済史という研究分野を際立たせることは、科学的分業の一つの例にすぎない。それは、暫定的な孤立化であり、一つの特異な集団をなす諸事実や諸力

をより十分に研究するために行われる (Ashley 1893, p.15)。では、このような経済史の研究は、なぜ行われるのだろうか。彼は、経済史研究には三つの目的があると述べる。その第一は、「自然で純粋な好奇心を満たすため」である (Ashley 1893, p.18)。多くの者にとっては、ただ知りたいという願望が唯一の動機であり、それは十分に研究を正当化する事由となる。

しかし、第二に、経済史が現代の議論と密接に結びついているということが、追加的な動機になっている。これは、イングランド人とアメリカ人の特殊な習性、すなわち先例愛の帰結である。いわゆる「アングロ・サクソン」精神にとっては、過去に云々の条件が存在したという事実は、それ自体、それらは現在においても存在すべきである、という強い理由となる。例えば、15世紀はイングランド労働者の黄金時代であったという学説は、最初はソロルド・ロジャーズによって提唱され、今ではほとんど承認された真理とみなされているものであるが、社会主義者たちはこれを踏まえて、8時間運動は長らく失われていた労働者の幸福を回復させようとするものにすぎない、と主張している。そのような運動のどれかに賛成したり反対したりするためにのみ、われわれは歴史に眼を向けるわけではないが、われわれの研究が現代の議論に対して興味深い関係を有しているという事情は、まさに、経済史にいっそう強烈な興味を付与するかもしれない、というのである (Ashley 1893, pp.19-20)。

そして第三に、経済史を通じて、人間社会の進化についての概念把握に到達できるかもしれないという希望によって、この研究分野に引き寄せられる者もいるかもしれない。これは、アシュレー自身の希望でもあった。かつてイングラムは、そのような歴史の統一的な概念把握を、「社会学」によって果たそうとした。しかし、アシュレーは、社会学はその役割を果たすことができないと考えていた。「そのような歴史の統一的な概念把握のどれからも、われわれ

が今なおはるかに遠いところにいるということは、ほとんど言う必要がない。とりわけ、『社会学』の殻 (the husks of 'Sociology') で虚しく空腹を満たそうとしてきた者については、そうである」 (Ashley 1893, p.20)。アシュレーによれば、歴史の統一的な概念把握の中心として期待しうるのは、むしろ経済史なのである。「人間が飢餓という罰を受けたときに満たすことを強制されてきた恒常的な日々の必要の中に、地球が所蔵している有用物を取り出すために行われてきた不断の労働のなかに、生産物のいっそう賢明な分配を求める努力のなかに、われわれは、連続する糸、統一的な一般化を見出すかもしれない」 (Ashley 1893, pp.20-21) というのである。しかし、人間社会の進化を統一的に理解するカギが経済史にある、というのは具体的にはどういうことであろうか。われわれは、節を改めて、この問題を考察することにする。

2. 経済発展の理論

「社会現象の統一性」という観点、すなわち経済・政治・法・道徳・宗教などに分類される諸現象は、それぞれ孤立しているのではなく、相互に密接に関連しているのだという観点は、歴史学派を特徴づける観点の一つであった。アシュレーは、そのなかでもとくに経済的なものの重要性を強調し、人間社会の進化を統一的に理解するカギが、各時代の経済的条件のなかにあると主張した。この点について、彼は次のように述べる。

私は、まじめな研究者はみな次の点で私に同意すると確信している。どの特定の時代の社会構造も、その経済的条件に基礎を置いているのであって、この種の特殊なものの大部分は、それらが経済的条件に関係づけられるまでは、本質的に取るに足らないものである。 (Ashley 1899 a, p.24)

ここでは、各時代の社会構造が経済的条件に基礎を置いているということが、明白に指摘さ

れている。この主張は、一見すると、マルクスの唯物史観と同じもののように見える。確かに、19世紀末から20世紀初頭にかけての時期といえば、社会科学の諸分野で、唯物史観が問題にされるようになる時期である。アシュレーもまた、この時期に経済史を研究したわけであるから、唯物史観についての態度表明を避けることはできなかった。彼は、マルクスおよびその後継者たちの歴史観について、次のように述べる。

カール・マルクスは、非常に能力のある人物だが、そう思われていたほどには、学識があるわけでも独創的であるわけでもなかった。彼が習慣的に用いた言葉が含意していたのは、どの特定の時代の経済的状況も、その時代の政治的、知的、さらには宗教的現象さえも条件づけるだけではなく、それ自身に関係するようなものとして創り出すということであった。マルクスの弟子たちは、彼を「唯物史観(materialistic conception of history)」の「発見者」として賛美し、明らかに最もなじまない事柄にもそれを適用することを躊躇しなかった。(Ashley 1899 a, pp.25-26)

「最もなじまない事柄」にも唯物史観を適用するというのは、例えば、特定の宗教上の教義を経済的な環境の産物とみなすような態度のことである。同様の歴史観が、ドイツの歴史家カール・ランプレヒトなどによっても唱えられていたが、アシュレーの理解では、この歴史観の核心は、特定の経済的條件が特定の政治的・知的・宗教的現象などを「創り出す(create)」あるいは「引き起こす(cause)」とみなしていることであった。つまり、ある特定の経済的條件と、ある特定の他の社会現象との間には必然性があり、他の形態の結合はありえないとする考え方であった。これに対してアシュレーは、経済的條件は他の社会現象を「条件づける(condition)」けれども、それ以上ではないと主張する。複数の政治的制度、複数の宗教的見解が一

定の経済的條件の下で可能だというのである。歴史の経済的側面が政治的發展を一貫して条件づけてきたというのは正しいけれども、前者が後者を決定したわけではない。経済的條件に制約された枠内で、愛国心や個人的天才のような原因が世界史を左右することもある。例えば、ベルシアに対するアテネの抵抗を、アッティカ地方の経済的状況によるものとして記述するのは、真理に反している。また、ノルマン・コンクエスト(1066年)以前のイングランドを同時代のフランス・ドイツと比較するとき、イングランドがその後、相対的に強力な統治体制を確立したのに対して、他の王国にはそれができなかったという事実を説明するものは、ノルマンディ公ウイリアムのような支配者がイングランドを征服し、ヘンリー2世、エドワード1世のような人物がそれに続いたという環境を除くと何もない、というのである(Ashley 1899a, p.27)。さらに、ひとつの思想体系は、外的環境によって創り出されたと考えられるときでさえ、周囲の環境には精確に対応する変化がなくても、明らかにそれ自身の内的論理によって発展し、その最初の形態と全く違うものに成長することがしばしばある(Ashley 1899 a, pp.26-27)。歴史の経済的側面は、たいていの歴史家が考えているよりもはるかに重要であり、唯物史観を支持する論者がこれを強調したことには大きな意義があったけれども、裏づけない性急な主張は避けなければならない、というのがアシュレーの考えであった。

経済過程を静態的にではなく動態的に捉えようとする観点も、歴史学派の特徴であった。確かに、古典派経済学においても、人口と資本が増加してゆくときに諸階級への分配がどのように変化するかを考察する、という意味での動態的な視点は存在した。しかし、それは動態といっても、ある社会状態を前提とした上で経済的な諸量の変化を考察するものであった。歴史学派の動態論というのは、むしろ古典派が前提とした社会状態がどのようにして生成してきた

のかを問題にするものであった。アシュレーは、歴史学派のこの側面について、次のように述べている。

歴史的探究にこのように真剣に取り組むことによって、その探究が目指さなければならない一般化の本性が、より明晰に知覚されるようになった。それは、現行の経済学説の単なる訂正や敷衍ではなく、むしろ経済発展段階の性格と配列に関する結論であるだろう。ここでの観点は、もはや所与の社会条件における個人間の売買という観点ではなく、諸産業・諸階級全体の生活と運動、社会的メカニズムの創造と修正、経済現象と経済思想の並行的進歩と相互作用という観点なのである。(Ashley 1893, p.7)

イギリスにおいては、クリフ・レズリーやイングラムのような初期の歴史学派が、経済発展の過程を「歴史法則」として定式化しようとした。すなわち、彼らは、どの地域にも当てはまる普遍的な歴史法則を発見することができると考え、これを探究することを自らの課題としたのである。ところが、トインビーになると、そのような歴史法則の発見は可能であるとしつつも、性急な定式化には慎重な姿勢を示すようになった⁹⁾。アシュレーもまた、経済発展の過程をなんらかのかたちで一般化しようとする観点、すなわち「経済発展の理論」を追求する観点をもっていた。しかし、彼の経済発展の理論は、歴史法則を探究するという方向においてではなく、いわば研究上の道具を開発するという方向で、展開されたのである。アシュレーは、例えば、工業の発展過程を研究する方法について、次のように述べる。

さて従来、工業の発展に関する諸段階を区別するために多くの努力がなされてきたが、その努力

は有益であったと思う。有益であったという理由は、ある特定の状態の本質的特質を深く理解するための最善の方法の一つは、それと比較するための、ある他の状態を知ることだからである。もっともその際、その区分をあまりに厳密なものと考えないように注意しなければならない。またそれは扱いにくいものであってはならない。すなわちそこには、過渡的・中間的な状態がありうることを、言い換えればそのような可能性、否おそらくその蓋然性を十分に認めなければならない。またもちろんわれわれは、あらゆる国がすべての段階を必ず経過するに違いないなどと考えるとはいえず、ましてあらゆる職業がそうであるにちがいないなどと考えるではない。(Ashley 1914, p.36, 訳 45 頁)

そのような諸段階に対して、誤解のおそれのない簡潔な名称を与えることは困難であるが、それらの各段階の本質的特徴を忘れないようにするならば、その言い表し方はいずれでもよいという。このように述べた上で、アシュレーは、工業の発展段階を4段階に区分し、それぞれに次のような名称を与える。すなわち、(1)家族ないし家計制度(family or household system)、(2)ギルドないし手工業制度(gild or handicraft system)、(3)家内工業制度(domestic system or house industry)、(4)工場制度(factory system)、これである(Ashley 1914, p.36, 訳 45 頁)。歴史研究において一般化が必要になるのは、専門的歴史家にとって、それが研究上有益だからというだけではない。教養ある一般大衆は、歴史叙述の細部の厳密さにはほとんど無頓着である。彼らが知りたいと思っているのは、個人や出来事がある大きな全体とどのように関係しているか、その意義はいったい何であるのか、ということである。もし訓練された有能な学者が、この自然で賞賛に値する欲求を満たそうとしないならば、能力のない著作家がそれを試みるであろう。もし歴史家が細部の研究に終始して歴史の大きな流れを示さないならば、また経済学者

9) トインビーについては、佐々木(2003)を参照されたい。

が仮説的な世界の考察に終始して歴史に目を向けないならば、教養ある一般大衆の要求に応えることはできないのである (Ashley1899a, pp. 29-30)。

このような発展段階の過程を具体的に検討し、アシュレーの歴史認識について考察することは、疑いなく興味深い問題であるけれども、本稿では経済史研究の詳細にまで踏み込むことはできない。ここではただ、方法論争との関連で、経済史研究の性格に言及することができるだけである。この問題についての詳細な研究は、別稿の課題としなければならない。

おわりに

ここまで、アシュレーが方法論争をどのように総括していたのかということを検討してきたわけであるが、その要点を整理して本稿のまとめとしたい。第一に、アシュレーは、方法論争が起こった原因は、両陣営の研究者の適性に関心が相違していたことにあったと考えた。自分が特定の方向に沿って考えるのは、主として自分自身の精神的適性がその方向に合っているからであり、自分自身が惹かれている研究が、すべての課題のなかで最も緊急かつ有益なものだと感じるのは、きわめて自然である。したがって、ある程度の対立が生ずるのは避けられないことであったが、他方の陣営の方法を否定しようとしたのは行き過ぎであった。第二に、一方の方法を他方の方法で置き換えようとする試みは、実際に成功しなかった。かつての過激な歴史学派が抱いた望みというのは、経済学における抽象的・演繹的・理論的な方法を廃棄して、これを歴史的方法によって置き換えるということだった。すなわち、経済理論の前提を現実的なものにするために、事実の調査研究から一般的なものを導出する過程が、演繹的推論に先行しなければならない。演繹的推論を行うのは、その後でなければならない、というのであった。しかし、この主張は、理論的研究をはるか

かなたに先送りするものであり、経済理論を事実上否定するものであったから、理論派はもちろんのこと、理論の役割に理解を示す歴史学派の論者からも、批判を招くことになった。その意味で、過激な歴史学派の路線は挫折したといわなければならない。しかし、第三に、方法論争は正統派経済学者の考え方に影響を与えた。すなわち、「学説の相対性」「社会現象の統一性」「行為の多元性」といった歴史学派の観点が、正統派の経済学者にも共有されるようになった。それによって、理論家は、自分自身の理論が狭い範囲をとり扱うものであることを自覚するようになった。また、現代の経済的条件を理解するために、それらの歴史的発生について考察するようになった。第四に、方法論争の結果、それまで軽んじられていた研究分野が、その地位を高めるに至った。ドイツにおいては理論的研究が、イギリスにおいては歴史的研究が、経済学上の一分野としての権利を獲得した。そのような権利が認められるまで、相応の戦いが必要だったのである。第五に、方法論争を通して、歴史学派の進むべき方向が明らかになった。今や、ドイツにおいてもイギリスにおいても、歴史学派の経済学者は、精力的に経済史の研究に取り組んでいる。アシュレーが方法論争を総括するさいに最も強調したのは、この点であった。もう方法論争は終わりにして、本来の研究に専念すべきである。このアシュレーの言葉は、実際に歴史学派のその後の方向を表すものでもあった。

本稿においては、アシュレーの経済史研究の詳細に踏み込むことはできない。ここではただ、彼が経済史研究の一般的性格について述べていることを確認することができるだけである。イギリス歴史学派の展開との関連で、とくに二点だけ最後に述べておくことにしたい。アシュレーによれば、経済史家が関心をもつのは、それぞれの時代に社会の制度的枠組みになっていたものであり、経済発展の問題である。第一に、経済理論が問題とする「需要」と

「価格」の関係などは、社会の制度的枠組みと関連させて初めて意味をもつ。現代の経済についての諸定式は、経済史家にとって、便利な比較基準となることはある。しかし、現代の経済理論を、それが想定している条件を備えていない社会に、直接に適用することはできない。このような「学説の相対性」の観点は、歴史学派の論者たちがほぼ例外なく強調していたものであった。第二に、経済発展の問題について見るならば、アシュレーは、人間社会の進化を統一的に理解するカギが、各時代の経済的条件のなかにあると考えた。かつて、クリフ・レズリーやイングラムは、経済学を社会学に吸収するというかたちで、社会現象の統一的理解を図ろうとした。これに対してアシュレーは、経済史こそが統一的理解のカギであると主張した。つまり、「社会現象の統一性」という観点は、イギリス歴史学派の展開のなかで、その内容を変化させていったといわなければならない。社会学から経済史へと、社会現象の統一的理解を担う中心が変化したことを、アシュレーの議論が示していたのである。

付記

* 本稿は、平成 18-19 年度科学研究費補助金(基盤研究(C))による研究成果の一部である。

参考文献

- Ashley, A. 1932, *William James Ashley: A Life*, London: P.S. King.
- Ashley, W.J. 1889, James E. Thorold Rogers, in R.E. Backhouse & P.J. Cain eds., *The English Historical School of Economics*, Vol.1: Bristol: Thoemmes Press, 2001.
- Ashley, W.J. 1891, The Rehabilitation of Ricardo, in *Economic Journal*, Vol.1.
- Ashley, W.J. 1893, On the Study of Economic History, in Ashley 1900.
- Ashley, W.J. 1894, Roscher's Programm of 1843, in Ashley 1900.
- Ashley, W.J. 1896, Historical School of Economists, in R.H.I. Palgrave ed., *Dictionary of Political Economy*, Vol.2., London: Macmillan.
- Ashley, W.J. 1899a, On the Study of Economic History After Seven Years, in Ashley 1900.
- Ashley, W.J. 1899b, Socialists of the Chair, in R.H.I. Palgrave ed., *Dictionary of Political Economy*, Vol. 3., London: Macmillan.
- Ashley, W.J. 1900, *Surveys, Historic and Economic*, New York: Augustus M. Kelley, 1966.
- Ashley, W.J. 1908, The Enlargement of Economics, in *Economic Journal*, Vol.18.
- Ashley, W.J. 1907, A Survey of the Past History and Present Position of Political Economy, in R.L. Smyth ed. *Essays in Economic Method: Selected Papers read to Section F of the British Association for the Advancement of Science, 1860-1913*, London: Gerald Duckworth, 1962.
- Ashley, W.J. 1909, *An Introduction to English Economic History and Theory*, Part I, The Middle Ages, 4th ed., London: Longmans, Green and Co., 野村兼太郎訳『英国経済史及学説』岩波書店, 1922。
- Ashley, W.J. 1914, *The Economic Organization of England*, in R.E. Backhouse & P.J. Cain eds., *The English Historical School of Economics*, Vol.6, Bristol: Thoemmes Press, 2001, 矢口孝次郎訳『イギリス経済史講義』有斐閣, 1958[G.C. Allen による増補版(1949)の訳]。
- Ashley, W.J. 1955, Sir William Ashley: Some Unpublished Letters, in *The Journal of Economic History*, Vol.15, 徳増栄太郎訳「アッシュレー教授(経済史学者の)未発表書翰(ルヨ・ブレンターノ教授宛)」, 横浜国立大学『エコノミア』第8巻第1号, 1958年。
- Clapham, J.H. 1927, Sir William Ashley, in *Economic Journal*, Vol.37.
- 服部正治 1999, 『自由と保護——イギリス通商政策史

——』ナカニシヤ出版。

Keynes, J.N. 1891, *The Scope and Method of Political Economy*, 1st ed., London: Macmillan, 上宮正一郎訳『経済学の領域と方法』〔第4版の訳〕日本経済評論社, 2000年。

Koot, G.M. 1987, *English Historical Economics, 1870-1926*, Cambridge University Press.

Leslie, T.E.C. 1875, The History of German Political Economy, in Leslie, *Essays in Political and Moral Philosophy*, Dublin: Hodges, Foster, Figgis, 1879.

西沢 保 2007, 『マーシャルと歴史学派の経済思想』岩波書店。

佐々木憲介 2000, 「クリフ・レズリーの歴史的方法」, 北海道大学『経済学研究』第50巻第3号。

佐々木憲介 2001, 「J.K.イングラムと歴史学派運動」, 北海道大学『経済学研究』第51巻第3号。

佐々木憲介 2003, 「A.トインビーの歴史的方法と社会改良主義」, 北海道大学『経済学研究』第52巻第4号。

佐々木憲介 2006, 「W.カニンガムにおける理論と歴史」, 北海道大学『経済学研究』第55巻第4号。

Schumpeter, J.A. 1954, *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press, 1954, 東畑精一訳『経済分析の歴史』全7冊, 岩波書店, 1955-62年。

Semmel, B. 1960, *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought 1895-1914*, London: George & Unwin, 1960, 野口建彦・野口照子訳『社会帝国主義史』みすず書房, 1982年。

田村信一 1993, 「ヴィルヘルム・ロッシャーの歴史的方法」, 『経済学史学会年報』第31号。